

## 外国にルーツを持つ子どもの「言語の捉え方」 —学齢超過で来日したネパールの子どもの縦断調査から—

富田江美子（一橋大学大学院言語社会研究科 院生）

### 1. 研究目的

近年、外国にルーツを持つ子どもは年々増加傾向にあり、一方で、15歳を超えて来日した学齢超過の子どもも増えつつある。しかし、そういった子どもは中学校にも高校にも通っていないため社会的な調査からは見えない、いわば社会から「見落とされがち」な子どもであり、そういった学齢超過の子どもの現状を明らかにする必要がある。さらに近年、ネパールなどの多言語環境で育った子どもも増加しているが、そのような多言語環境で育った子どもの言語を捉えた研究は少ない。そこで本研究では、多言語環境で育ち、学齢超過で来日した子どもの「言語の捉え方」が日本での生活の中でどのように変化するのかを明らかにする。

### 2. 先行研究と本研究の意義

幼少期に複数言語環境で成長した経験のある、外国にルーツを持つ人々の言語の捉え方、また言語学習や自己形成の変化を探るため、ライフストーリーインタビュー法で調査した研究は、尾関（2013）川上（2010）などが挙げられる。これらの研究は、幼少期からの生い立ちや家庭環境、複数言語の使用状況、言語学習経験などが、個々人の言語能力に対する意識の形成に大きく影響を与え、さらにそれが自己形成や言語学習全般への動機や姿勢に深く関わっていることを明らかにした。このように幼少期の言語とのかかわり方をライフストーリーインタビュー法で調査した研究の社会的意義は大きい。しかし、学齢超過の子どもという社会から見えづらい存在に焦点を当てた研究、そしてその子どもを縦断的に調査した質的研究は少ない。子どもの今現在の言語の捉え方を縦断的に探ることは、その子どもの困難、葛藤などを丁寧に読み解くことに繋がる。また、多言語環境で育ったネパール出身の子どもは増加傾向にあり、今後そういった子どもを支援していく上でも、言語環境を探ることは急務であると考えられる。

### 3. フィールドの概要・インタビュー協力者・調査方法・分析方法

インタビュー協力者は、外国にルーツを持つ学齢超過の子どもが高校進学へ向けて学習をするフリースクール（以下、Aスクール）に所属していたネパール人の17歳の女性、レイ（仮名）である。調査は、2016年3月から2016年7月にかけて、ひと月に一回程度、計6回、30分から1時間程度行った。インタビューでは、最近の生活、高校生活への思い、将来の夢、複数言語環境についてについてなど、レイの生活や、レイの言語に対する思いを語ってもらった。分析にあたっては、まず文字化データを基に、言語にまつわる語りと、言語環境に関する語りを書き出した。次に語りにラベルを付け、全体的なストーリーを組み立てていった。最後に語りに合わせて分析、考察を試みた。

### 4. 分析結果と考察

#### 4.1. 日本語学習を支える英語学習成功体験

レイは、日本語を日本にいる限り習得していく言語として語り、生活言語として道具的に捉え

ていた。しかし、日本語学習に対して意欲を見せる語りもあった。その意欲の根源となったのが、ネパールの学校生活で得た、英語しか話してはいけないという環境で英語を習得できたという英語成功体験であった。その英語学習の成功体験が日本語環境の中で日本語が必ず上達するという確信を持つことに繋がり、その言語学習の成功体験が新たな言語学習の動機となっていったのであろう。1つの言語が「習得できた」という経験を持つのが困難である幼少期と異なり、学齢超過の子どもにとって、「外国語の学習に成功した」という経験は、心の拠り所になると推測できる。

#### 4.2. ネパール・ネパール語に対する思い

レイから、その母語に執着したアイデンティティや母語保持に努めるべきだという言語アイデンティティは語られず、またレイは母語を継承していこうとも、忘れようとも意識していなかった。ここから小張(2004)が言うように、「母語＝アイデンティティ」という公式は成り立たない場合があることが分かる。さらに福永(2016)は、在日パキスタン人へのインタビューから、外国人の母語感について考察しており、在日パキスタン人は母語に対してマイナスの価値評価をしている者がいることを明らかにしている。ネパールは122の言語が存在する多言語国家である。その中でレイは、ネパール人の約40%が使用するネパール語を母語としている。レイからは、その母語やネパールという国に固執する思いはさほど語られなかったが、自分が経験してきたネパールという国の言語環境は、自分を創るものとして彼女の中に息づいていた。

#### 4.3. 複数言語環境の捉え方

英語、ネパール語、日本語の3言語が交差してレイの言語生活は形成されていた。一見複雑に見えるレイの言語環境だが、レイは自然のこととしてとらえており、混乱や煩雑さを感じることはないと言っていた。レイはその3つの言語に囲まれた環境を普通の状態として捉えていたのだろう。自分の言語のレパートリーすべてが、レイを構成しているようであった。

### 5. 子どもの日本語教育への貢献

以上のことから、外国語学習に成功したという言語能力意識がレイを支え、また母語に固執せず、複数言語環境をあるがままに受け止めるレイの姿勢が、レイ自身をつくっていることが明らかになった。様々な背景を持ち来日する学齢超過の子どもたちが増えている今、彼らの言語の捉え方を詳細に読み解くことは、彼らの言語アイデンティティに寄り添うことに繋がり、彼らと我々支援者とがよりよい関係性を作り、支援を進めるための一助になると考えられる。

#### 【引用文献】

- 尾関史(2013)『子どもたちはいつ日本語を学ぶのか - 複数言語環境を生きる子どもへの教育 -』ココ出版
- 小張順弘(2004)「フィリピン多言語社会での言語とアイデンティティ - セブアノ多言語話者の事例から」小野原信善・大原始子編著『ことばとアイデンティティ - ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し』三元社、pp.53-76
- 川上郁雄(編)(2010)『私も「移動する子ども」だった - 異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー』くろしお出版
- 福永由佳(2016)「第19章母語に対する評価の諸相 - 在日パキスタン人の言語使用意識調査を手がかりに」宇佐美洋編著『「評価」を持って街に出よう「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』くろしお出版、pp.322-335